

下司古墳群

辰 巳 和 弘

デイヴィス記念館の南側、テニスコートとの間に緑地として残された南向きの旧地形のなかに、横穴式石室を埋葬のための施設として、七世紀前葉にありついで築造された小円墳七基が保存されている。これが下司古墳群である。本来は、さらに西寄りにもう一基の古墳が存在し、合計八基によって群が構成されていたが、この古墳は後世に石室を構築していた石材が抜き取られて大きく破壊されていた。

横穴式石室とは、四世紀後葉に朝鮮半島から北部九州へ伝播し、六世紀前半には急速な全国的拡大をみた墓制で、一つの墓室（石室）内に追葬が可能な構造である点が大きな特徴である。下司古墳群でも幾つかの

古墳において、最初の埋葬が行われた後、さらに一〜二回の追葬が行われており、ほぼ七世紀を通して奥津城として利用されたことが発掘調査の結果明らかとなった。

発掘調査は同志社が田辺校地を購入する以前の一九六三年に一〜三号墳に対して実施され、その後田辺校地造成との関係から、一九八三年に五〜八号墳に対して実施され、その調査報告は『下司古墳群』（同志社大学校地学術調査委員会調査資料No.一九）として刊行されている。

まず下司古墳群の立地については、テニスコートが造成された現状では、本来の立地を窮い知ることは難しいが、普賢寺川の形成した狭長な谷平野を眼下にみる丘陵斜

面の上位付近、海拔七五メートルから九二メートルの部分に位置し、東側は新宮社西寄りの竹林中にみられる浅い開析地形を境とし、西側はプール南側のやや大きく南へ突出した地形を境とした東西幅約一二〇メートルの範囲を「造墓域」として設定していたことを推察させる。こうした古墳群に関する造墓域の存在は、近年研究者の間で注意されつつある。

各古墳はまず丘陵斜面に石室を構築でぎるだけの平坦面を得るため、平面で「」状に斜面を掘り込み、その中に南に開口する横穴式石室を構築した後、石室の背後に丘陵斜面から墳丘を区画するための溝（周濠）を掘削し、その土砂を石室上に盛りあげて墳丘を形成したものと考えられ、現在でも二号墳に良好な墳丘と周濠の状態をみることもできる。周濠の状況から各古墳ともに円墳であったことがわかる。墳丘の大きさは埋葬施設である横穴式石室の規模と相関しており、最大の一号墳では墳丘の直径は約一三〇メートル、最も小さな六号墳では約一四メートルを測る。そして海拔高度の低い位置にある古墳ほど大型で、墳丘占地の上

やや傾斜角度の緩やかな、より良好な場所を選定している様子が窺える。

横穴式石室は花崗岩とはんれい岩によって構築されており、いずれもその産地を生駒山地に求めることができ、おそらく普賢寺谷に沿って搬出されてきたものと考えられる。

最大規模の石室は一号墳で、玄室部分とそれに至る羨道部からなり、全長約八・五メートル、玄室長約三・五メートル、奥壁幅約二・〇五メートル、高さ約二・一メー



下司2号墳の横穴式石室

トルを測る。またそれにつぐ規模の二号墳では全長約七・四メートル、玄室全長約二・七メートル、奥壁幅約一・六メートル、高さ約一・八メートルを測る。一方、最も規模の小さい六号墳は玄室と羨道の区別のない無袖式の石室で、全長約二・四メートル、幅〇・八六メートル、高さ約〇・六メートルである。これら各古墳から出土した須恵器や土師器などをはじめとする副葬品は、この古墳群が七世紀前葉にあいついで築造されたことを示している。この時代は畿内およびその周辺地域では古墳の築造が終了した後の時期にあたり、その時期にあつた古墳の築造が行われたという点から、下司古墳群の被葬者達は、七世紀に入つてあらたに政治的・社会的に台頭してきた人々であつたと考えることができる。

さらに一号墳の石室は、山城地域最大の横穴式石室である嵯峨野の蛇塚古墳（京都市右京区）のその二分の一の規格で構築されるとともに、山城一带の丘陵に密集して築造される古墳群中の最大の石室と同一平面形であることから、山城地方一帯で一定の規格のもとに石室が造られていたことがわかり、六・七世紀の山城地方の社会的な秩序を相対的に類推するうえで重要な資料となる。

出土した遺物のなかで注目されるのは、一号墳出土の頭に鍍金を施した銅鍔五点と、二号墳出土の三個体以上の鉄製鏝座金具である。これらはいずれも被葬者を納めた木棺の付属物であり、朝廷を構成した官人層を埋葬したとみられる古墳からしばしば出土する遺物であり、下司古墳群の被葬者の性格の一端を明らかにしている。

下司古墳群が築造された直後、まだ追葬が行われていた七世紀後半には、古墳群の南西五〇〇メートルの地点に普賢寺跡として白鳳期の古瓦を出土する寺院が建立されており、当古墳群の被葬者たちにより建立された氏寺とみられ、古墳・寺・氏族の關係を知るうえで興味深い。さらに『興福寺官務牒疏』にはこの普賢寺跡が「筒城寺」と呼称されていたと記述されており、綴喜郡という郡名を寺院名とする点においても、南山城地方屈指の有力氏族の姿が浮んでくる。

（大学校地学術調査委員会調査主任）